

KUNIO10

更



作
大田省吾
演出・美術
杉原邦生

出演
南沢奈央
濱田龍臣

地

濱田龍臣(はまだ たつおみ)
千葉県出身。子役時代から大河ドラマ『龍馬伝』や『怪物くん』などで注目を集め、16歳で史上最年少のウルトラマンとして『ウルトラマンジード』主人公に抜擢。これまでの出演作に、ドラマ『モブサイコ100』主演、『花のち晴れ〜花男 Next Season〜』、映画『記憶にございません!』『ブレイブ〜群青戦争〜』『ハニーレモンソーダ』など多数。2021年12月10日公開映画『軍艦少年』にも出演が決まっている。舞台は三谷幸喜作・演出『大地 (Social Distancing Version)』で初舞台を踏み、杉原邦生演出『オレステスとピュラデス』にも出演した。

“更地”には可能性を感じる

濱田龍臣

邦生さんとは昨年『オレステスとピュラデス』で初めてご一緒し、実りのある経験をさせていただきました。その邦生さんから今回、また別の作品でお声がけいただいたのはうれしかったです。

『更地』には、土地の記憶や思い出が描かれていて、考える余地が広い作品だなと思いました。初老の夫婦という設定には戸惑いましたが、邦生さんが「2人が遊び合っている感じ」とおっしゃったのをヒントに、“初老の2人が少年少女の心を忘れずに、今も遊びながらさまざまなことを発見している”と考えたら、少し気楽に、楽しく演じられるようになりました。

“更地”という言葉からは、“何にでもなれる場所、可能性が広い土地”というイメージが浮かびます。台本に「なにかも、なくしてみるんだよ」というセリフがあるんですけど、“更地”は新たなことを想像したり創造したりする可能性を持った言葉だなと。そのイメージはこの作品にも通じると思うし、演じるうえで自分が大切にしたいポイントでもありますね。

舞台は今回で3本目。毎回お客さんからエネルギーをもらってお芝居できるのは、すごく幸せなことだと思います。特に今回は二人芝居ですから、南沢さんとじっくり演じられるのがうれしいです。演じながらどんどん感情が変化していくのが面白くて、一体どんな舞台になるのか、できれば客席から観てみたいです(笑)。

みんなで 作っている感じが心地いい

南沢奈央

初めて台本を読んだときは、二人芝居だし、静かな会話劇になるのかなと思ったのですが全然逆で(笑)、“静か動か”で言えば“動”のお芝居。感情の動きも激しくて、掛け合いの中でいきなり閃いて世界が広がったりする、ものすごくエネルギーに満ちた作品です。ラップには今回初めて挑戦したのですが、セリフを言う感覚の延長でやろうとしています。お芝居の中に入ってきても特に唐突な感じはせず、「2人がまた新しい遊びを始めたな」と思えるような演出になっていると思います。

今回邦生さんからは「2人が演じたり、遊んだりしている感じで」と言われていて、それがヒントになっています。ナチュラルな感情の流れでやろうとすると唐突に感じる展開も、遊んでいると思えば楽しめるなって。ただ、2人が長年一緒にいる空気感を出すのはやっぱり難しく。噛み合ってなくても受け流す感じとかが、うまく出せれば良いのですが……。

“更地”という言葉からは最初、“そこにあったものがなくなってしまった寂しさ”をイメージしていました。でも稽古が始まってから、“更地だからこそ、なんでも作れる”という考えもあるんだと気付いて。そういう心境になれたのは、稽古場の雰囲気が本当に良いからで、邦生さんは役者のアイデアを楽しんでくれるし、ご自身もいろいろ意見をくださって、みんなで作っている感じが心地いいです。この空気感がそのまま作品に乗って、未来へのエネルギーが感じられるような『更地』になればと思っています。

南沢奈央(みなみさわ なお)
埼玉県出身。2006年に女優活動をスタート。2008年の主演ドラマ・映画『赤い糸』(CX)で注目を集める。その後も大河ドラマ『軍師官兵衛』(NHK)を始め、ドラマ・映画・舞台・CM・ラジオMC、書評、執筆などで活躍。2009年『赤い城 黒い砂』で舞台デビュー。近年の主な舞台出演作品に『罪と罰』『恐るべき子供たち』『ハムレット』(2019)『阿呆浪士』『ハルシオン・デイズ2020』(2020)『アーリントン』『岸辺の亀とクラゲ jellyfish』『羽世保スウィングボーイズ』(2021)など。

太田省吾とは、どういう人だったか

2007年に死去した太田省吾。そのひとりとなりや作風を、周囲はどう感じていたのか。転形劇場時代から太田作品を追いかけ、ジャーナリスト時代には太田にインタビューもしたという、彩の国さいたま芸術劇場 業務執行理事兼事業部長の渡辺弘と、太田の教え子で太田作品の演出助手なども務めた杉原邦生が、“太田省吾とは、どういう人だったか”をそれぞれの視点で語った。

——お二人は太田さんの作品とご本人、どちらと最初に会いましたか？

杉原 | 僕はまずご本人です。京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）の入学式の後のオリエンテーションで「学科長の太田省吾です」って挨拶があって、「こんなボス猿みたいな人が学科長なのかあ」って（笑）。その数日後に、京都芸術劇場 studio21のこけら落として太田さん演出の『更地（韓国版）』（2001年）を観て、「こんな演劇もあるんだ」と衝撃を受けました。

渡辺 | 僕は、転形劇場のアトリエで観た『硝子のサーカス』（1976年）が最初ですね。当時友達と劇団をやっていたんですが、彼は品川徹さんが好きで、僕は瀬川哲也さんに似てると言われて、2人でよく真似をしていたんです。その後ジャーナリストになって太田さんに会う機会が増え、直接お話するようになりました。ただ80年代って野田秀樹さんや第三舞台などものすごいスピードでしゃべる演劇が多かった時代なので、太田さんの芝居のように超スローな動きで、言葉が少ない演劇は、本当に独特な存在でした。

——太田さんご本人の印象は？

杉原 | 僕の在学中、造形大は先生との関係がけっこう密だったので、太田さんや山田せつ子さん、森山直人さんたち教員が僕たちの芝居を観に来てくれて、打ち上げにお呼びしたり、食事に行って感想を聞く、ということがよくありました。太田さんに言われたことで一番に思い出すのは、初めて演出したteuto vol.2『アドア』という作品で、ほかの先生は同級生の書いたテキストを褒めてたんだけど、太田さんだけ「君の演出が良かった」って言ってくれたんです。僕の演出を初めて褒めてくれたアーティストだったので、うれしくてよく覚えています。また太田さんはお酒が入るとけっこう饒舌で、下世話な話も好きだったし、普通に人間っぽいところが

あるなど。そう思って改めて作品を見ると、お茶目なところやコミカルなところもあるし、エロスとか人間の色気が描かれているなと思いました。

渡辺 | 確かにちよっとお茶目なところはありましたね（笑）。インタビューで太田さんは、答えるまでにちよっと間が空くんですよ。決して多くは語らないんですけど、一度考えてからゆっくり話し出す。その間が独特でした。

——太田さんが主宰する転形劇場は1988年に解散。その後、藤沢市湘南台市民センターの芸術監督に就任します。

渡辺 | 太田さんが湘南台市民センターの芸術監督になられたのはびっくりしましたね。『更地』初演もそこで観ました。プラネタリウムみたいに天井が高くて、不思議な空間なんですけど、そこへ老夫婦の岸田今日子さんと瀬川さんが現れて会話を繰り広げるんです。途中で白い布がパーッと舞台にかけられて新たな更地となる、その印象がすごくありますね。でも今回は、若い2人でやるんですよね？

杉原 | はい。太田さん演出の『更地』では、過去を思い出したり掘り起こす印象が強かったんですね。でも僕が2012年に演出した時は東日本大震災の翌年ということもあって、僕たちはこれからもっと先のことを考えなきゃいけないんじゃないかと思ったんです。それなら若い俳優でやったらどうだろうと。また内容的にはジェンダー観など、ちよっと昭和の匂いがするところもあるんですけど、若い俳優がライトに演じるとそれが中和されるというか、ある種のファンタジーになると思ったんです。なので今回も若い俳優を起用することにしました。渡辺 | 俳優にとっては試練だね。太田さんの作品は言葉が少ないから、演技者として内面をどう埋めていくかが問われ、とても大変だと思う。

杉原 | そうですね。稽古のほうもまさに“これから”が勝負です！（笑）

——初演時も今回も、杉原さんは「太田さんの芯をブラさずに自分なりの演出を」と意気込みを語っていらっしゃいました。杉原さんが思う、“太田さんの芯”とは？

杉原 | 僕は太田さんから、人間の存在を舞台上でしっかり描くということと、社会に対して作品をどういう態度で発表するかを常に自問自答し、自己批評し続けるということを学んだと思っています。逆にそこさえブレていなければ究極、ゆっくり歩かなくても『水の駅』になるだろうし、巨大な白布を使わなくても『更地』になるんじゃないかなって。また上演する劇場はどんな劇場か、どんな機構があつてどのくらいの奥行きで、どのくらいの舞台の高さにするかなどは非常に大事に考えます。今回は3劇場で上演しますがどこもダイナミックな空間で、そこに更地を作る、ということはどういうことかを考えています。

——演出の先輩としての太田さん、アーティストとしての太田さんについては、それぞれどんな印象をお持ちですか？

杉原 | 先生としてはすごく厳しかったです。作品に対する作り手の甘えを絶対に見逃さなかったし、だからすごく鍛えられたと思います。その一方で太田さんは愛情深くて、2007年7月にお亡くなりになり、僕はその年の3月に大学院を卒業したんですが、当時太田さんは闘病中で入院なさっていて、卒業式だけ駆けつけてくださったんです。で、大学院生だけ卒業証書を手渡ししてくれて。僕が太田さんに直接お会いできたのはそれが最後でしたが、学生のことを最後まで考えてくれたのがとても印象的でしたね。

渡辺 | 太田さんは演劇界の中では独特な方だと思います。活動初期に沖縄の返還問題について三部作を書いていたり、割と早い時期にポーランドで公演したりと、アングラ全盛期のあの時代、鈴木忠志さん、唐十郎さん、別役実さん、蛭川幸雄さんたちが活躍する中で、自分はどうやっていくべきか、ずっと誠実に時代と演劇に向かい合ってきたと思うんです。その誠実さは尊敬しますし、結果的に独自の地位を築かれたのではないでしょう

杉原 | そんな太田さんが、今回の『更地』やさいたまゴールド・シアター『水の駅』によって再び光が当てられることについてはどう思われますか？

渡辺 | ゴールド・シアターの『水の駅』は、あなたが2019年に上演した『水の駅』を観なければ思いつかなかったと思います（笑）。観ながら僕の中でワーッと太田さんのことが思い出された。『小町風伝』は老婆の幻想、『更地』も老夫婦など太田さんの作品には高齢者が出てくるなあと気づいたんです。改めて読み返すと現在の状況にも重なってくる。長い人生を背負って生きてきた人たちの存在感は現代能に見えてくる。太田さんの芝居はこれからもっとやられても良いのではないかと思います。なので杉原さんは、これから太田作品を伝えていく役目を背負っていくのだろうと思います。

——ゴールド・シアターの『水の駅』について、もう何かプランを考えていらっしゃいますか？

杉原 | 今はまだ『更地』に集中しているので具体的なことはこれからですが、僕が影響を受けた蛭川さんが遺したゴールド・シアターと、恩師の太田さんが遺した作品をつなげる、こんな大役を担わせていただけるなんて本当にありがたいですし、実際僕ぐらいしかいないかなって（笑）。今回はある種の使命感を感じています。なので2019年に上演した『水の駅』のことはいったん忘れて、彩の国さいたま芸術劇場 大ホールという空間をダイナミックに使いつつ、彼らの饑^{はなむけ}として意義のあるものにしたいなど。大きな空間でやることで、太田作品にある宇宙の中の人間みたいなスケール感をこれまで以上に表現できると思うんです。また現代は言葉がすごく力を持ってきたので、あえて言葉を排した表現で、僕らが社会に何を提示できるかをきちんと考えたいですし、演劇的にも社会的にも意味がある公演にしたいと思っています。

渡辺 | 蛭川さんと太田さんって当時は距離があつたと思いますが、今回はゴールド・シアターが結びつけてくれました。杉原さんには、蛭川さんと太田さんから受け取ったものをゴールド・シアターに注ぎ込んで、新たな“宇宙”を作ってほしいなって。杉原さんにとって、これはすごく大事な仕事になると思います。

杉原 | そうですね。責任重大ですが本当に楽しみです！

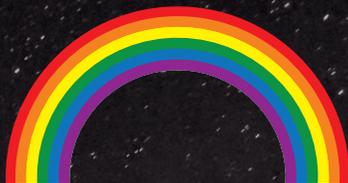
渡辺弘

埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長。1953年栃木県生まれ。演劇ジャーナリストとして活動後、銀座セゾン劇場の開設準備などに携わる。東急文化村シアターコクーンの運営・演劇制作やまつもと市民芸術館の開設準備・企画運営を経て、2006年から現財団に携わる。

杉原邦生

渡辺弘

KUNIO10 更地



出演	南沢奈央 濱田龍臣	大道具	生駒研介 [STAFF ONLY Inc.]
作	太田省吾	宣伝美術	加藤賢策 前田晶子 [LABORATORIES]
演出・美術	杉原邦生	宣伝写真	吉野洋三
音楽	Taichi Kaneko	宣伝ヘアメイク	国府田圭
照明	高田政義 [RYU]	web	小林タクシー 阿波屋鮎美
音響	稲住祐平 [エス・シー・アライアンス]	編集	凜
衣裳	藤谷香子 [FAIFAI]	協力	太田美津子 大鹿展明 小野哲史
振付	白神ももこ [モモンガ・コンプレックス]	制作	吾妻優子 長生愛梨 安部祥子
演出助手	矢本翼子	プロデューサー	横井佑輔 金森優依
舞台監督	藤田有紀彦		穂坂知恵子 (新潟・東京公演)
			井出亮 (京都公演)
			小林みほ [KUNIO]
演出部	伊藤久美子 石橋侑紀	京都公演	
衣裳進行	白井梨恵 [モモンガ・コンプレックス]	制作	河本彩
衣裳製作	中西康子	広報	後藤孝典
照明操作	帆足ありあ 葭田野浩介	舞台管理	大野淳一郎 [㈱ピーエーシーウエスト]
音響アシスタント	長田美弥子 後藤田早希	照明管理	小山陽美 [㈱ピーエーシーウエスト]
ラップ指導	板橋駿谷	音響管理	オモ美里 [㈱ピーエーシーウエスト]
歌唱指導	櫻井都乃	技術監督	大田和司
映像撮影	神之門隆広		